

旧本多家住宅長屋門

保存修理工事 上棟式

- 【日 時】平成 29 年 1 月 29 日（日）午前 10 時 30 分～ 12 時頃
【場 所】おたかの道湧水園入口前（国分寺市西元町 1－13－10）
【主 催】国分寺市教育委員会
【協 力】株式会社文化財保存計画協会・松井建設株式会社
【木遣り】北多摩睦消防組第二区二番組

【次 第】

- 1 挨拶
- 2 四方固め
- 3 祝い木遣り
- 4 曳綱
- 5 槌打ち
- 6 餅撒き
- 7 棟梁送り
- 8 手締め



解体前の長屋門 平成 28（2016）年 12 月 15 日 南から撮影

開催趣旨

かつて家を建てることを「家普請」と呼びました。普請とは普く人々に請うという意味で、家を建てる際に、地域で暮らす人達は、お互いに協力し手伝い合いました。そして建て主から職人や地域住民への感謝の意を込め、上棟式（建前）が行われていましたが、近年、そのような習慣はなくなりつつあります。この度は、旧本多家住宅長屋門の保存修理工事に御協力いただいた市民の皆さんへ感謝の意を表し、上棟式の再現を行います。

旧本多家住宅長屋門

指定名称：市重要有形文化財（建造物） 旧本多家住宅長屋門

指定年月日：平成 24（2012）年 2 月 24 日

構造形式：木造 2 階建、寄棟造、^{よせむねづくり}寄棟造、亜鉛鉄板葺

建物概要：桁行 48.6 尺・梁間 15 尺の総 2 階建てで、中央に両開き門扉とその右隣に片開き^{くぐりど}潜戸 1 間を備えます。1 階通路を挟んだ西側は土間の物置、東側は四畳半と六畳の二間にコンクリートのタタキや縁側、北東隅には切妻平屋の便所が取り付きます。本多家は江戸時代中期以降、国分寺村の名主を務めた家系です。同家には弘化 5（1848）年 3 月の「表御門御長屋仕様御注文」があり、長屋門の仕様と平面図が書かれています。また、幕末から明治にかけて村医・書家として活躍した本多^{すいけん}雖軒（1835～1916）が、ここを居宅兼診療所としていたことも伝わり、農家の長屋門には珍しく、居室と物置を合わせた建物であることが特徴です。

保存修理工事

工事件名：おたかの道湧水園内歴史的建造物保存修理工事

工事期間：平成 27 年 9 月 9 日～平成 29 年 9 月 1 日

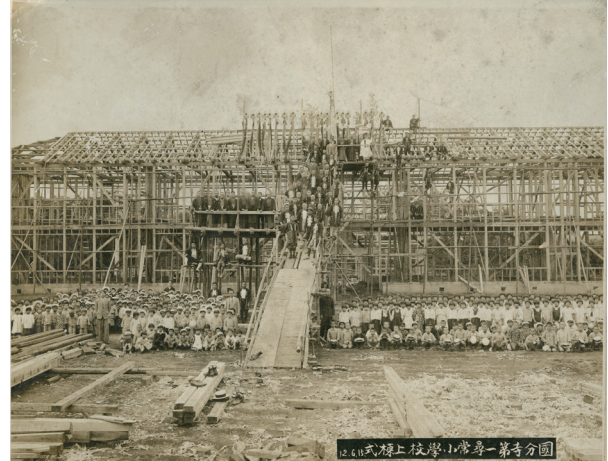
工事概要：長屋門を後世に伝え残すとともに、公開活用施設とするために実施している工事です。劣化が著しかったため、一旦は建物を全部解体しましたが、建物各所に使われている部材を詳細に観察することで、創建当初の姿、その後の補修を行った形跡を検証しました。修理工事では、可能な限り既存の材料を利用して、同じ位置に建てなおし、耐震補強、展示空間としての整備も行います。

上棟式とは？

建物の骨組みを組み立てることを建前^{たてまえ}といい、屋根の一番高い所に棟木^{むなぎ}を設置することを上棟^{じょうとう}（棟上げ^{むねあ}）といいます。昔、家を建てる時には、大工など職人の他に、地域住民の相互扶助が不可欠で、人手が必要な建前・上棟は、村中あげての一大イベントでした。その時に、建て主が、職人や近隣の方々の協力に感謝し上棟を祝い、その後の現場と建物の安全を祈願して行う建築儀礼を上棟式、もしくは建前^{たてまえ}（立前）と呼びます。式には、建て主、大工、^{とび}鳶、左官などの職人と、親類、近隣の人々が参加します。神主を呼ぶ場合もありますが、大工の棟梁^{とうりょう}が式をとりおこなうことも多かったようです。



上棟式の飾り 中藤新田（国分寺市西町）池谷一家 昭和 61（1986）年



国分寺第一尋常小学校上棟式 昭和 12（1937）年

棟木の飾り

・幣串^{へいぐし}

9～12cm角、長さ 240～360cmのヒノキの柱に七、五、三本の横筋が墨で入れられたもので、大工の棟梁^{とうりょう}が作ります。ヘイゴシと発音する場合があります。幣（紙垂）、扇、五色の布、鏡、櫛、髻^{くし}*（元々は女性の髪の毛）などで飾られます。幣串に女性のものを飾る理由については、棟梁が依頼された仕事に失敗して悩んでいたときに、棟梁の奥さんの助言に従ったところ仕事が成功し、依頼主からも大変ほめられたため、感謝の意を込めて飾るようになったという話が一般的に伝わっています。本日飾る幣串は 1 本ですが、上棟式の規模に応じて 1、3、5、7 本と奇数本飾られます。

* 髪を結ったり垂らしたりする場合に、地毛の足りない部分を補うための添え髪・義髪^{ぎはつ}のこと。人毛の他、牛の尻尾を使う。

・弓矢^{はま}（破魔弓・破魔矢）

幣串と並べて、弓矢を 2 本、表鬼門（北東）と裏鬼門（南西）へ向けて設置します。表鬼門を指す矢は鵠矢^{かぶら}、裏鬼門を指す矢は雁股矢^{かりまたや}と呼び、それぞれ形が異なります。本日は鵠矢は鶴の図案、雁股矢は亀の図案のものを使用していますが、その他にも矢の図案には波と雲などがあります。

供え物

建物の上に祭壇を設け、米、塩、水、酒、海のもの（お頭付の魚、鰹節、昆布、スルメイカなど）、山のもの（人参、大根、ジャガイモなど）、果物（みかん、りんごなど）を供えます。ネギは神職の禰宜と同じ音であることから避けられます。本日は、安全のために祭壇は地上に設けました。

上棟式の流れ

上棟式は、およそ次のような流れで行われます。

- ・祝詞奏上^{のりと そうじょう} 神主（棟梁）が祝詞を読み上げ、供物を供える。
- ・四方固め^{し ほうがた} 酒、米、塩を建物の四方に 3 回ずつ撒く。
- ・曳綱^{ひきづな} 棟木に結ばれた綱を引きあげる。
- ・槌打ち^{つち う} 「千歳棟」^{せんざいとう}「万歳棟」^{まんざいとう}「永永棟」^{えいえいとう}と言いながら棟木を槌で 3 回打込む。
- ・餅撒き^{もち ま} 建物上から餅や供物を撒く。餅撒きに使用する餅は、建て主の家で式の前に搗いておく。併せて 5 円、50 円など小銭を紅白の紐で結んだものや半紙でくるんだものを投げる。

なおらい 直会

上棟式が終わると、施主が、職人や手伝いをしてくれた近隣の人々の労をねぎらって、おもてなしをする宴が開かれます。これを直会といいます。

とうりょう 棟梁送り

直会が終わると、大工の棟梁を先頭に、他の職人、施主、親戚等が列を作って、鳶職人が上棟式で使った幣串や弓矢を抱え、木遣り^{きやり}＊を唄いながら棟梁の家まで送っていきます。これを棟梁送りといいます。幣串や弓矢は縁起物として棟梁の他、鳶、左官など職人で分けます。

＊ 木を遣り渡す（運ぶ）という意味で、重い木や石を大勢で運ぶ際、息をあわせるために唄ったものです。江戸では、町火消しの鳶のたしなみとして発展し、上棟式や祝儀、また祭礼などの練り唄に転用され、独特の木遣り唄が生まれたといわれています。今回木遣り実演を行う北多摩陸消防組第二区二番組は、木遣り^{きやり}、纏、梯子等の伝統芸能を継承している鳶職人による団体です。



餅撒き（左）と棟梁送り（右） 中藤新田（国分寺市西町）池谷一家 昭和61（1986）年

古文書に見る国分寺村の上棟式

旧本多家住宅長屋門の上棟式の様子を伝える資料はありませんが、同じように国分寺村の名主・組頭を歴任した家柄の金子家については、金銭の出入を管理した帳簿の「日記出入簿」に上棟式（立前と表記されています）の準備に関する記載があります。明治14(1881)年11月19日に行われた金子両右衛門居宅立前について「日記出入簿」から普請見舞・買物・祝儀の記事を集めて、当時の立前の様子を見てみます。

普請見舞 立前に際して、居宅普請に関わった親類や近隣の方々から縄や金銭が贈られるのが通常で、縄は立前や普請に使われ、木造建築の当時としては一般的な風習でした。

買物 立前の数日前から当日にかけて必要な物品を府中の店から買い揃えています。その多くは食品類で、その他に料理に付随する品物があります。16日醤油、17日酒樽・黒砂糖^{たけびしやく}・竹柄杓^{しやくし}・杓子^{しのぼし}・味噌漉し、18日^{あじ}鰯干物・油揚げ^{いわし}・鰯^{まぐろ}・醤油・鮪^{たご}・担桶^{あこうだい}・鰯^{そうだかつお}・赤魚鯛^{さんま}・宗太鯉^{いけす}・秋刀魚^{いけま}が見えます。例えば鰯干物300枚・秋刀魚150本のように大量に購入しているのは、立前にお供えするためだけではなく、立前が終わったあとに開かれる直会の宴で食され、立前参加者や普請の手伝いに出てくれた親類・近所の方々への祝儀用の贈答品にするためでもありました。鰯干物と鰯が別々に記載され、「そふだ勝ヲ（宗太鯉）」には、生簀や活間に使うカンコの記載があるなど、わざわざ鮮魚として運ばれたことを推測させますが、特別な行事のために特に取り揃えた品物だったことが解ります。また、当日に餅^{もち}が搗かれ、投げられた銭1,000貫文が計上されています。餅は全部で1石7斗になり、これは現在で言えば米10kgの袋16個分ほどに相当し、篠箸50人前を購入するなど、宴が盛大に行われた様子が解ります。

祝儀 直会が終わると棟梁送りを行い、祝儀が贈られますが、この時には、分梅村や屋敷分村（現在の府中市）の大工、国分寺村の^{そま}杣^{こびき}・木挽、村内で普請の手伝いに来ている人々に祝儀として金銭や餅・酒が贈られています。餅は供物を載せる容器でもある飯台^{はんだい}で運ばれ、酒樽もいっしょに贈られており、直会と祝儀の品々は、普請の開始から立前まで携わってきた人々への感謝とお祝いの印でした。

当時の建物の普請は、近隣の村々と村内の大工・杣・木挽き、手伝いに人足の手によって全てが賄われていました。村の名主の立前ともなれば、村をあげての盛大なお祝いだったことでしょう。

発見された2つの長屋門 ー解体・発掘調査の概要ー

現在、保存修理工事中の長屋門は、古文書に弘化5(1848)年の注文書が残っていることから、幕末頃の建造物と考えられます。ところが、長屋門を解体する直前の現況図面(①図)と、注文書に描かれた絵図(②図)を比べてみると、整合しない箇所が幾つもあることに気が付きます。

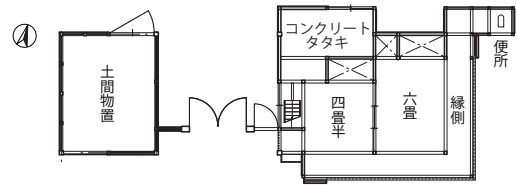
例えば、1階東側の現況は四畳半と六畳の和室2間があり、その北側にコンクリートのタタキ、和室の南から東にかけては縁側が取り付け、さらに建物の鬼門(北東隅)には便所が設けられていますが、絵図では和室は六畳2間が並列し、中央の通路に沿って板の間・式臺・二畳の和室があります。また、2階に上る階段も現況では通路際にありますが、絵図では建物の北側に描かれています。一見両者は似ているようで、実際は注文書通りの建物にはなっていません。特に、屋根は大きく構造が異なっているようで、御注文書には「^{さす}杈首松丸太式間」という記載があります。この「杈首」とは、白川郷の合掌造りの民家のように、勾配が急な茅葺屋根を指しますが、現況の屋根は「^{わごや}和小屋」といって、^{はり}梁の上に^{つかばしら}束柱を立てて棟木を支える、勾配の緩やかな屋根でした(③図)。これらのことから、建築後約170年近くもの過程で、後世に建物の各所を修繕し、大きく改変しているのだろうと解体工事前は予測をしていました。

ところが、昨年2月に解体工事と並行して、建築部材を詳細に観察したところ、随所に後補材(後に補修したり、取替えした部材)が認められたものの、門の鏡柱や冠木は取り換えた形跡がありませんでした。また、屋根の主要な小屋組材や基礎の土台には、手斧加工や角釘といった明治時代初期までの古い技術が使われ、さらに組み合う部材同士に記した墨書きの番号が符号することも確認しました。そのため、和小屋の小屋組に、縁側や便所が取り付けく現況建物の主要な構造は、建築当初からの

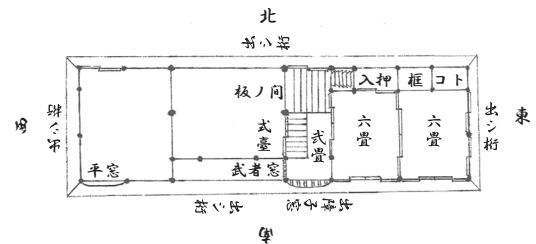


解体前の小屋組 西から撮影

①解体前現況1階平面図



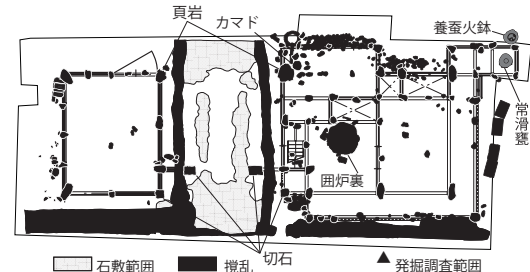
②弘化5(1848)年「表御門御長屋仕様御注文」の1階平面図



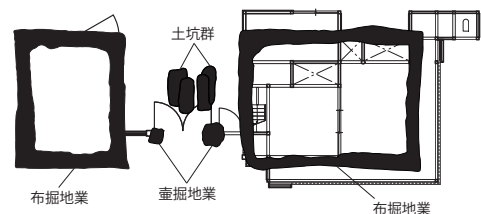
③解体前現況梁間断面図・南面立面図



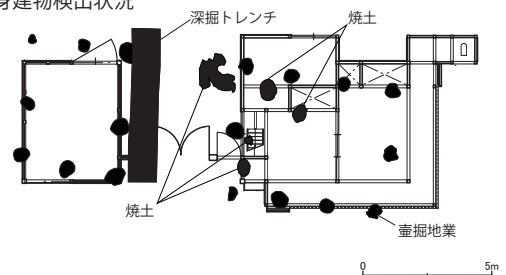
④解体工事直後の状況(礎石・石敷面等検出状況)



⑤基礎地業の状況と通路下検出の土坑群



⑥前身建物検出状況



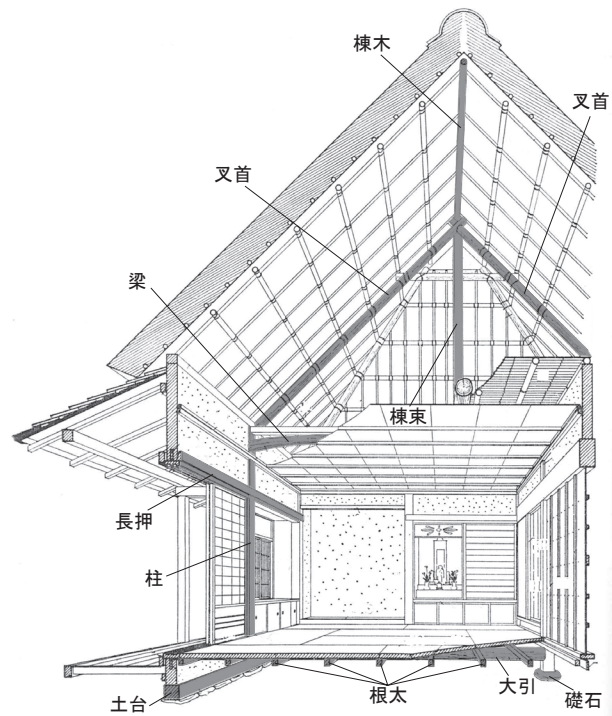
姿をほぼ踏襲しているものと判断しています。

引き続き3月からは発掘調査に着手し、基礎に使われている礎石の観察から始めました。すると、その殆どは砂岩製の玉石でしたが、門扉の鏡柱と通路部の正面にある柱の4箇所は安山岩製の切石、通路部の背面にある柱には大型の頁岩を用いるなど、外観上目立つ箇所には礎石を意図的に使い分けている状況が窺えました（図④）。なお、この頁岩製の礎石は大きさや材質から、近くの武蔵国分寺の遺跡にあった、どこかの建物の礎石を江戸時代に転用した可能性が考えられます。

また、四畳半の和室中央には、木杭と板材で四周を囲んだ内側に灰を溜めた囲炉裏の痕跡や、コンクリートのタタキの直下からはカマドと思しき焼土が確認されました。囲炉裏の周囲や建物の外周からは、主に幕末期以降の陶磁器類・棧瓦・ガラス・建具・草履・銭貨等の様々な生活用具が出土しましたが、なかでも近代の瓦は出土量が最も多く、しかも建物の外周部にその分布が際立っているため、今は亜鉛鉄板葺の長屋門の屋根は、元々は瓦葺であった可能性があります。また、解体調査では、建物の北西隅の柱とタタキ付近の柱は後補材の可能性があるとして見立てましたが、これらの柱の礎石の下には近代の建築材が差し込まれていたり、ガラスや大正時代の陶磁器類が出土するなど、建築学の所見と発掘調査の結果が見事に合いました。

長屋門を建てるにあたっては、まず敷地全体に黄色いローム土を敷き均します。その後、物置部分と部屋・式臺の外周にそれぞれ溝を巡らせて、溝の中をロームと礫で版築した「布掘地業」と、門の鏡柱2石の下には単独で円形の穴を掘って同様に版築する「壺掘地業」が施されていました。主要部の柱を支えた礎石は、これらの地業の直上に据えられており、極めて堅牢な基礎普請を施している状況がわかりました（図⑤）。

また、近年まで車両の出入用に使っていた通路の直下からは、南北に長い長形状の土坑（穴）が4基並んで確認されました。いずれもロームの整地土を掘り込んでいたため、長屋門建築以降の施設であることは明らかで、穴の中からは焼けた土と炭化した木材が確認されました。これらは何の目的で使われたのでしょうか。それを考えるヒントとして、「武州松山町／正横明製陶所」の刻印がある瓦質の養蚕火鉢が便所の北脇から出土し（図④）、解体前に2階からは蚕棚・糸繰等の民具を回収したことは注目されます。主屋への入口にあたる門ではありますが、ある時期には通路を塞いで、建物のなかで養蚕を営んでいた可能性が考えられ、その場合これらの土坑は蚕を温めるための養蚕炉として機能していたのかも

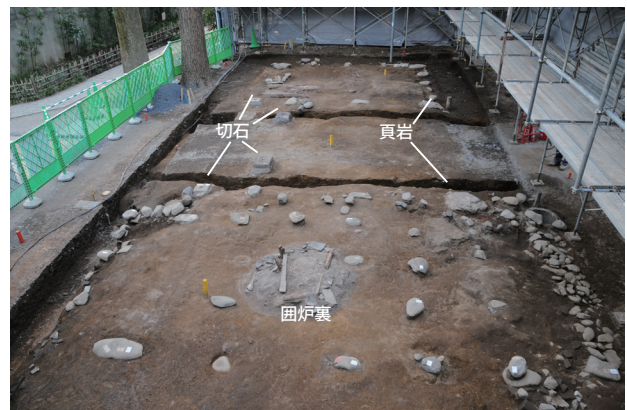


建物の部材名称

太田博太郎ほか編『民家のみかた調べかた』（1967年第一法規出版）を一部改変



根太撤去後の六畳 北西から撮影



解体後 礎石残存状況 東から撮影

しません。

さて、ローム土の整地層を取り除くと、下からは黒褐色土が現れます。この上面では固い円形のロームが18箇所並んで確認されました(図⑥)。全てに版築(転圧)を施しているため、礎石を据える「壺掘地業」の痕跡と思われますが、礎石自体は全く残っていませんでした。配列をよく観察すると、西側建物と約4.4mの距離をおいて東側建物の2棟ありそうですが、柱の並びが南北両側で揃うため、本来は1棟の建物を構成していたもので、しかもそれは中央に通路を伴う長屋門形式の建物として復元することが出来そうです。現存の長屋門と比べてもほぼ同規模で、主軸はやや南に振れますが真北を向き、重なる位置で発見されたことになります。また、建物の中央には、囲炉裏もしくはカマドの痕跡と思われる焼けた土や粘土があり、付近からは18世紀後半～19世紀前半の陶磁器・銭貨等が出土しているため、この建物跡は弘化5(1848)年以前に建っていた一世代前の礎石建ての建物と考えられます。

今回の修理工事は、現地表面から約50cmの深さまでを掘る計画ですので、面的な発掘調査はこの建物の確認をもって終了しましたが、部分的に深く調査したところ、さらに古い時代に遡る建物跡や遺物は発見されず、湧水がかつて流水していた痕跡を示す地層が、建物の約1m下から確認されました。

都内近郊で長屋門を発掘調査した事例としては、豊島区にあった旧田島平良家(明治41年築)や、神奈川県藤沢市の旧福原家(天保3年築)等が知られています。一般的に長屋門は、江戸時代中頃に名主クラスの農民には建てるのが許された門形式と言われていますが、地下から一世代前の建物が発見されて、しかもそれが長屋門だった可能性を掴めたのは今回の調査が初めてで、農家が構えた長屋門の歴史を考える上でも貴重な成果を得たと言えます。



発掘調査の様子 西から撮影



弘化5年創建長屋門の基礎普請状況と通路下の土坑群 西から撮影

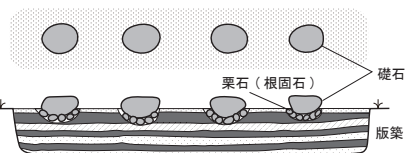


前身建物の壺掘地業(東側部分) 北から撮影

布掘地業

(上から見た図)

(横から見た図)

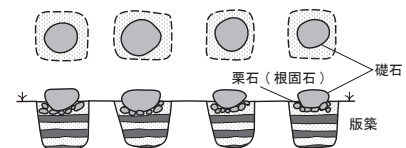


- ① 柱が並ぶ列を通して全体に溝を掘る。
- ② その中に異なる土を少しずつ入れて突き固める(版築)。
- ③ 礎石を固定する栗石(根固石)を据え、その上に礎石を乗せる。

壺掘地業

(上から見た図)

(横から見た図)



- ① 礎石を据える部分のみ単体で穴を掘る。
- ② その中に異なる土を少しずつ入れて突き固める(版築)。
- ③ 礎石を固定する栗石(根固石)を据え、その上に礎石を乗せる。

礎石を据えるための基礎地業(布掘地業と壺掘地業)

部材の繕い・加工

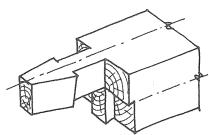
解体した部材を詳細に観察すると、柱・垂木・化粧材はスギ、土台はクリ、梁はマツといったように使用する場所によって材種を使い分けていることが判りました。損傷しているものは、傷んだ部分を削り、同じ新しい材種を継木して繕います。継木の方法には「金輪継ぎ」や「腰掛かま継ぎ」といった方法があります（下図参照）。損傷が激しく再利用が困難であったり、既に腐植等により残存してい箇所は、まるごと新しい材木に入れ替え、本来の部材と区別するために新しく補った材木には、全て「平成二十九年度修補」と焼印を押します。



柱（スギ）の継手（金輪継ぎ）加工



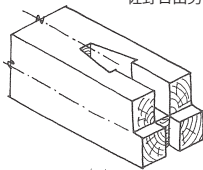
柱（スギ）の継手調整



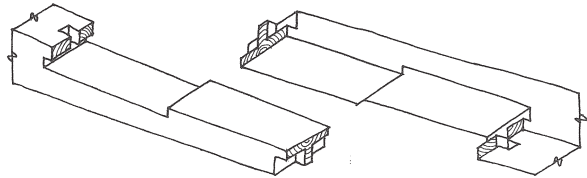
男木

腰掛かま継ぎ 姿図

佐野日出男『大作業の実技』（1973年オーム社）より

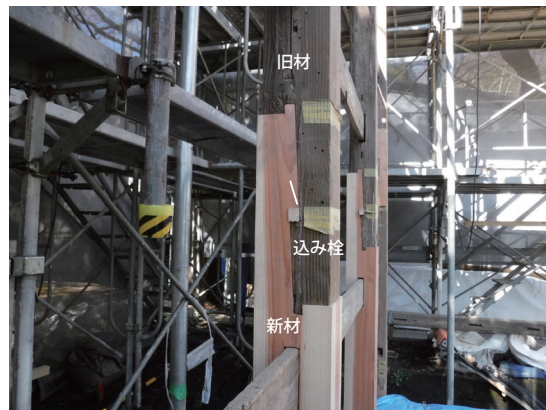


女木



金輪継ぎ 姿図

佐野日出男『大作業の実技』（1973年オーム社）より



柱（スギ） ※金輪継ぎ



土台（クリ） ※腰掛かま継ぎ



小屋梁（マツ）新規材料の加工 ※既存材と同じ屈曲を復原



貫（スギ） ※新規材料への焼印

長屋門の組み立て

繕いや加工作業が終了した後、大安の日にあわせて、平成 29 年 1 月 9 日（日）から柱を建て始めました。人の手で順番に柱を建て、横方向に貫を通して建物全体を固定していきますが、門まわりのケヤキ材の鏡柱など重い部材はクレーンの力を使って組み立てていきます。



柱を建て始めました（平成 29 年 1 月 9 日）東から



柱に貫を通して固定（平成 29 年 1 月 10 日）東から



鏡柱の設置（平成 29 年 1 月 12 日）南から



通路部分の組立（平成 29 年 1 月 12 日）南から



2 階梁の設置（平成 29 年 1 月 13 日）西から



小屋梁・中引がかかりました（平成 29 年 1 月 16 日）南西から

これからの長屋門

旧本多家住宅長屋門は、これで骨組みが出来上がりましたが、引き続き、屋根（垂木、野地板、銅板）や土壁（竹小舞、下塗、中塗、漆喰）などの工事を行って平成 29 年 9 月の完成を目指します。今後も、いずれかの機会に見学会等を開催する予定です。皆様の御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

国分寺市教育委員会ふるさと文化財課